

# 平成24年度 A幼稚園

研究テーマ

**発達障がいのある幼児一人一人の教育的ニーズを把握し、適切な支援を通して、幼児の安定と充実した園生活を目指す**

## 1. 課題設定の趣旨

本園では、一人遊びが多い、友だちとのコミュニケーションがとりにくい、興味・関心の幅が狭いなど、集団生活の中で大きな困難を抱える子どもの増加がみられる。

そこで、一人一人の子どもの実態を把握し、子どもの特性に応じた支援方法を探り、実践することで集団の中で安定・充実した幼稚園生活を送れるようになることを目指す。

また、巡回相談や研修を通し、教員の資質向上に努め、保育の質を高めていく。

## 2. 実践・研究の計画、方法

(1) 巡回相談において指導・助言を受ける。

○ 1学期…幼児の適切な実態把握について  
個別の指導計画の作成

○ 2学期…1学期の実態把握をふまえた個別の指導計画の充実、活用  
具体的な支援や指導方法の検討

○ 3学期…2学期の実態把握をふまえた個別の指導計画の充実、活用  
進級、進学に向けての個別の指導計画のまとめ方

(2) 研修会への参加

特別支援教育に関する研修会に参加し、発達障がいに対する理解を深めるとともに、支援方法を学ぶ。

(3) 区特別支援教育コーディネーター連絡協議会における情報交換

区特別支援教育コーディネーター連絡協議会に参加し、実態把握の方法や関係諸機関との連携の方法などの情報交換を行う。また、小・中学校を見通した支援を行うため、幼・小・中の連携体制作りを行う。

## 3. 実践・研究の内容

(1) 発達障がいのある幼児のケースについて

ア 幼児の実態把握

項目別に具体的に記入し、学期毎に園内委員会にて見直すことで、実態把握を行った。園内委員会だけでなく日々の保育の中で気づいたことを教職員間で出し合い実態把握を行った。実態把握を基に巡回相談で相談したいことを具体的にだし合った。

イ 個別の指導計画の作成

長期目標を念頭に、具体的かつ達成可能な短期目標を設定し取り組んできた。園内委員会で評価を行い、より具体的で、達成しやすい内容に変更し、幼児が達成感を味わいながら取り組めるように工夫した。

#### ウ 指導内容・指導方法の工夫

##### 【3歳児】

- ・20名の内、発達障がいの疑いのある幼児1名、知的障がいのある幼児1名、状況把握の弱い幼児3名、からだのバランスが弱い幼児3名など多数在籍。
- ・まず、見通しをもって安定して幼稚園生活が送れるように、次のような視覚的な支援を行った。

##### (例1) 準備の順番表



表を一つ一つ確認しながら自分一人で準備できる喜びを味わい、3学期からは表がなくても全員が身支度ができるようになった。

##### (例2) 開けてはいけない場所、触ってはいけない場所に×印を張った。



「ば一つ」と教師に確認しながら、入ったり、触ったりしないようになった。×印が取れていると「ばつ、ない！」と教師に付けてほしいことを言えるようになった。

- ・大きな音やざわついた雰囲気、雑然とした雰囲気が苦手やしんどくなりやすい幼児が、クラスから出て行った時は、無理に連れ戻さず、一旦、静かな職員室前の絵本コーナーで、好きな絵本を見させて落ち着いてから保育室に戻るようにした。いつも決まった場所で落ち着けることで安定できるようになった。

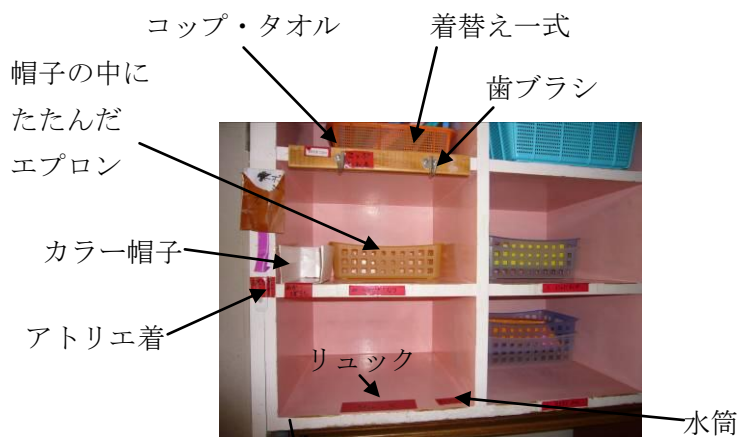
## 【5歳児】

- ・広汎性発達障がいと診断のある幼児1名、ADHDと診断のある幼児1名他、聴覚認知の弱い幼児、短期記憶が苦手な幼児、友だちとのコミュニケーションが苦手な幼児など多数在籍
- ・誰にとっても分かりやすい環境になるよう、教室内の構造化に取り組んだ。



### <スケジュール表>

一日の流れが分かるように書いておくことで、自分で確認をし、進んで行動するようになった。全員がそろった朝の会で確認することによって、保育室から勝手に出ていく園児が減り落ち着いて活動できるようになってきている。



### <ロッカーを使いやすく工夫する>

身支度に集中しやすく最後まで自分で済ませられる。散乱していた荷物も片づけられ、自分の持ち物も大事に扱うようになってきた。ロッカーを2段使って、物ごとにカゴやシールなどの目印を使って自身で気持ちよく整理整頓ができるようにしている。ロッカーに自分の持ち物があることが安心感にもつながっている。



### <保育室の一角にコーナーを設ける>

気持ちを切り替えたい時など、一人でホッとできる環境として活用している。また、一斉保育時に出て行った幼児が入り口を2か所にしたことでスムーズに集団に戻ってこられるようになった。

### <タイムタイマーの活用>

残り時間が視覚的にわかりやすく、昼食や片づけなどがマイペースだった幼児も時間内に済ませようと頑張れるようになった。また、製作や話し合いでも時間を決めてからすると5分、10分と座って活動する時間が伸び立ち歩く幼児も減ってクラス全体が落ち着いてきている。



## (2) 園内支援体制づくりについて

### ア 園内委員会の取り組み

- ・メンバー；全教職員
- ・学期に1回の巡回相談の後、園内委員会を行い、助言を基にした具体的な支援方法を話し合った。
- ・毎日、保育後に支援を要する幼児の様子などを話し合い、支援方法を探った。

### イ 関係諸機関との連携

- ・子育て支援室と連絡を取り合い、保護者への支援方法も検討した。

## 4. 実践・研究のまとめと今後の課題

学期に1回の巡回相談で気になる子どもへの支援方法を具体的に学ぶことができた。子育て支援室や療育施設とも連携しながら検討したことを保育に生かすことで、幼児が安定して園生活を送れるようになってきた。また、教師の発達障がいに対する理解も深まり、支援の幅が広がった。

課題として、保護者への理解・啓発があげられる。幼児への支援だけでは改善が難しいケースもあり、保護者の協力が不可欠である。今後、保護者との連携について学んでいきたい。